

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32693

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：19K19656

研究課題名（和文）子宮頸がんハイリスク者の定期検診継続のための看護支援の構築

研究課題名（英文）Building Nursing Support for Continued Routine Screening of High-Risk Cervical Cancer Patients

研究代表者

桐原 あずみ（KIRIHARA, Azumi）

日本赤十字看護大学・看護学部・非常勤助手

研究者番号：20757158

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：インタビューの分析から子宮頸部細胞診で異常が見られ、定期的に受診を継続している女性は、看護師と話す機会が少なく、相談するチャンスがあまりない現状が見えた。しかし定期的に受診を継続している女性は「看護師のほうから声が掛かったら話せるな」等、20～30歳代は周囲に健康に関する事柄の話しにくさなどから、看護師とのコミュニケーションのニーズを持っていた。しかし、看護師は忙しそう、自ら声をかけるほどではないという気持ちから、看護師から声をかけてほしいというニーズがあった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本ではHPVワクチン接種の接種率がまだ低い状況であり、HPVワクチン接種率が高い他国と同じように子宮頸部異形成の減少はまだ望めない状況である。そのため、20～30歳代の日本人女性が子宮頸部異形成が指摘された際に継続して受診が続けられるような看護支援を日本人女性のニーズに合わせて検討したことは意義がある。

研究成果の概要（英文）：Analysis of the interviews revealed that women who had abnormalities in cervical cytology and continued to receive regular checkups had few opportunities to talk to the nurses and did not have many chances to discuss their problems with them. However, women in their 20s and 30s who continue to receive regular checkups said that they would like to talk to the nurses if they are approached by nurses. However, they also wanted the nurses to talk to them because they felt that the nurses were too busy and did not want to talk to them themselves.

研究分野：看護学

キーワード：子宮頸部異形成 継続的な受診 質的研究 看護支援

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本では、毎年約1万人の女性が子宮頸がん罹患し、約3000人が死亡しており、2000年以後、患者数・死亡数ともに増加している(国立がん研究センターがん情報サービス, 2021)。子宮頸がん(上皮内癌含む)の罹患率は20歳代から増加し、30歳代では最も罹患率の高い癌である。(国立がん研究センターがん情報サービス)。この年代は働き盛り、妊娠出産と重なる時期であり、治療のため仕事が出来ない時間が生じることや妊娠出産が叶わないといった社会の問題にもつながりうる。

しかし、日本では子宮頸がんの原因となる人パピローマウイルス(HPV)の感染を予防するHPVワクチン接種が2013年から定期接種となり公費での接種が可能となったが、副作用の問題から2013年に積極的な接種勧奨の一時差し控えを行い、HPVワクチンの接種率は1%未満(日本産婦人科医会, 2021)と低い状況であった。そのため妊娠出産時期と重なる20~30歳代女性にとっては、子宮温存が可能な前がん病変の治療時期を逃さないよう定期的な子宮頸がん検査を受けること、特に異常が見られてからはガイドラインに沿った受診間隔で受診を継続することが必要である。子宮頸部細胞診で異常が指摘された後、必要時実施されるコルポスコピー検査を受けた人の体験として、診断そのものやその病因・予後、治療法などに内在する不確実性・曖昧性があり、個人史の再構築のプロセスが複雑化していること(Rajaram et al., 1997)が明らかとなっていた。子宮頸がん検査での異常は一部が癌化していく可能性があるが、多くの場合は自然と改善していく。そのため、異常が指摘され経過観察を行っている段階において、状況の不確実性・曖昧性つまり不確かさが生じやすいのだと考えた。国内では、子宮頸がん検診を継続する人への看護ケアの必要性が指摘されている(大塚・眞嶋, 2020; 大塚他, 2017; 黒澤・伊藤, 2016)。しかし、子宮頸がん検診で異常が指摘された人は、子宮頸がんの早期発見・早期治療に向けて継続した受診が必要となるが、積極的な治療の適応ではないことから、医療者との関わりは希薄であること(大塚・眞嶋, 2020)も指摘されており、個々が不確かな状況で、どのように子宮頸がん検査の受診を継続しているかは十分明らかにされていない。現在の日本の医療システムでは、異常が指摘され医療での受診の継続は本人の受診行動に委ねられている。そのため、日本において子宮頸がん検診で異常が指摘された経験のある人、特に日本で子宮頸がんの罹患率の高さが問題となっている20~39歳の人々が、不確かな状況の中で、どのように受診を継続しているのか、その体験を明らかにすることで、日本での長期にわたる子宮頸がん検査の受診の継続を支える看護ケアを検討していく一助になると考えた。

2. 研究の目的

子宮頸がんハイリスク者の定期検診継続のための看護支援の構築を検討すること。

3. 研究の方法

(1) 研究デザイン

本研究デザインはジオルジの現象学的アプローチを用いた、質的記述的研究デザインとした。

今回、子宮頸がん検査で異常が指摘されたことのある成人前期にある女性が受診を継続する体験を明らかにするため、質的なアプローチを選択した。質的研究は、研究参加者の視点 perspective から生活体験を記述する学問的なアプローチである。そしてそれは、人の主観的な体験に意味を与え、看護実践につながる洞察を得る方法である(Zuzelo, 2012)。今回の研究目的を達成するためには、当事者の視点に立って、生活体験の理解をより深めていくことが必要と考えたため、質的研究が適切と考えた。

(2) 研究参加者

下記の4つの適格基準をすべてを満たし、除外基準に該当しない20~39歳の女性6名程度とした。

適格基準:

過去または現在、子宮頸部細胞診で異常が指摘されたことがある。

子宮頸部細胞診で異常が指摘され、クリニックまたは病院で定期的な受診をはじめて3回以上経過している。ここでの定期的な受診とは、医師の推奨受診時期どおりでなくとも、本人の意思により受診を継続していることを含む。

インタビューを2~3回受けていただける。

インタビュー協力が可能と医師が判断する。

除外基準:

現在妊娠中である。

子宮頸部円錐切除術やレーザー治療等治療を実施予定である。

子宮頸部円錐切除術やレーザー治療等子宮頸がんに関する治療を受けたことがある。

(3) データ収集方法

非構造化インタビューを1人1回30分~1時間程度で実施し、子宮頸がん検査を継続する体験について話を聞いた。インタビューは、すべてWebで実施した。

4. 研究成果

適格基準を満たし、除外基準に該当しない6名に研究参加の同意を得て表1の通りインタビューを実施した。

表1:

	年齢	家族構成	仕事	インタビュー回数/ 合計インタビュー時間
A氏	20代後半	夫	会社員	3回/110分間
B氏	20代半ば	独居	会社員	2回/82分間
C氏	30代半ば	子供1人	会社員	3回/117分間
D氏	20代半ば	独居	会社員	3回/156分間
E氏	30代後半	実家	会社員	3回/121分間
F氏	30代後半	夫・子供2人	専業主婦	2回/107分間

インタビューの分析から子宮頸部細胞診で異常が見られ、定期的に受診を継続している女性は、看護師と話す機会が少なく、相談するチャンスがない現状が見えた。しかし定期的に受診を継続している女性は「看護師のほうから声が掛かったら話せるな」等、20~30歳代は周囲に健康に関する事柄の話しにくさなどから、看護師とのコミュニケーションのニーズを持っていた。しかし、看護師は忙しそう、自ら声をかけるほどではないという気持ちから、看護師から声をかけてほしいというニーズがあった。またその際には、看護師側に話を聞く体制がとれている状況が感じ取れ、些細なことでも相談して構わないのだという雰囲気を求めていた。医療者と良好な関係を保ちながら継続的な受診をしたいと考えており、看護師からのアクションの必要性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 桐原あずみ
2. 発表標題 子宮頸がん検査の継続受診に影響を与える因子に関する文献検討
3. 学会等名 第23回日本赤十字看護学会学術集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------